

台南のクロツラヘラサギ

陳 麒 麟
訳 福井和二

歴史・回顧

1849(嘉永2年)年日本によってクロツラヘラサギと命名され、世界に6種いるヘラサギ中最も小型で、最も遅く命名された。台湾で初めて記録されたのは1863年(清朝同治2年)Swinhoeによる淡水河河口での、観察、標本がある。1893年¹⁾英国の外交官 La Touche は台南市安平の岸辺において大型のクロツラヘラサギに似た一群の鳥を発見、遠距離であるため種を確定することができなかった。1925年から1938年、毎年台南市安平地区で50羽ほどのクロツラヘラサギが記録されている。1974年になって台湾の海岸管制のなか、1月9日朝、顔重威・陳炳煌の両先生が台南市の曾文溪河口の干潟で21羽のクロツラヘラサギを観察し、これが台湾人による最も早い記録で、10年後、台南鳥友の郭忠誠が同所に多くのクロツラヘラサギが生息しているのを発見した。

近年になっての観察記録は、1985年台南鳥会の冬季水鳥報告中に見られ、この後も毎年台湾における越冬が報告され、台湾の鳥友郭東輝と郭忠誠が1989年1月22日の朝、曾文溪河口北岸で130羽を記録し、アジア湿地水鳥調査報告によって、台湾が最大のクロツラヘラサギの越冬地であることを国際的に紹介した。1989年 Kennerley によりクロツラヘラサギのアジア各地の生息数が示され、この大型の鳥が当時わずかに288羽であり、その分布は日本5羽、韓国6羽、中国大陸16羽、香港米埔50羽、ベトナム紅河河口62羽、および台湾150羽と、世界のクロツラヘラサギ総数の2/3近くが台湾西南部湿地の曾文溪河口七股地区に越冬生息していることがわかり、この水鳥の稀少なこと、七股生息地の重要性に世人は驚ろいた。

地方団体の紛争と協力

1997年9月台南県クロツラヘラサギ保護学会が成立し、休日に観察小屋で行われる訓練された解説員を除き、劉良力の指導下にある研究生がクロツラヘラサギと生息滞在地と個体数、滞在地点の長期間調査を開始して、毎日ウェブサイト数を公表した。香港の生態顧問会社の責任による国際調査では、台湾のクロツラヘラサギ個体数はもともと中華鳥会が決定を下していた。1998年1月初めに双方の争いが始まった。その後南県野鳥学会、クロツラヘラサギ家族野鳥学会が相次いで成立し、各保護団体の観察記録方法がそれぞれ異なることから、クロツラヘラサギの個体数も一致することがなく、台南沿海のクロツラヘラサギの個体数について一致した定論がなく、各保護団体の記録している個体数も異なっていた。中央社の2004年11月30日では台南のクロツラヘラサギの最高個体数の記録に混乱が生じた。南市鳥会の12月調査報告では「今年の秋冬における台南沿海のクロツラヘラサギの個体数は今までの数を突破したと報じ、クロツラヘラサギ家族野鳥学会は11月26日に727羽の新記録であると報じ、台南県野鳥学会は11月28日に808羽の新記録を報じており、一時の間、台南に何羽のクロツラヘラサギが渡ってきているのかつかめないの、台南市野鳥学会は12月12日に再調査を行い、台南沿海のクロツラヘラサギ個体数を決定した」

台南市野鳥学会に招かれた台湾師範大学教授の王穎代表の主張で、洪理事長が経営する立国書局の協力で台南県、市の4ヶ鳥会共同歩調で台南沿海のクロツラヘラサギの調査に当たり、個体数調査のよりよい方法で、クロツラヘラサギの越冬期間中毎月2回一斉調査を行ない、市鳥会担当溪南地区、県鳥会担当頂山地区、北漁塩埭のクロツラヘラサギ家族、その他の部分はクロルヘラサギ保護学会が担当し12月12日第1回共同一斉調査を行なった。2004年12月13日メディアはこれを「台湾での越冬クロツラヘラサギについて、台南・高雄地区の4大鳥会が昨日その個体数を842羽と発表した。去年の最高記録728羽を遙かに超える個体数で、これは初めて4大鳥会が一致して認めたクロツラヘラサギの生息数である。クロツラヘラサギの個体数は各鳥会が調査して各々が発表していたが、その個体数はそれぞれ異なっており、局外の関係者を困惑させていたところ、協調の運びとなり、今日12日、台南県野鳥学会、クロツラヘラサギ家族野鳥学会、クロツラヘラサギ保護学会、台南市野鳥学会等台南地区の4大鳥会が派閥を打破し、初めて共同調査を行なった」と報道した。この調査は2005年4月に終わった。

2005年夏鳥類傷病救護検討会が四草保護区で開催され、王穎・王建平両教授および中華鳥会等各団体の代表が多数来場した。昼食後の休み時間、市鳥会に新しく赴任した陳培中理事長は、かき氷を食べながらのくつろいだ談話中、台南地域のクロツラヘラサギの持続的な分布資料を作るべきだが、いかなる経費の支持もなく、共同調査継続の必要性を認めている陳理事長も、市鳥会も資金が無く10年になることを承知して、各社会団体はこの情報を持ち帰って人を集めて力をつけることとした。10月初め、立国書局は検討して結論を出した。2005年、

王穎教授の指導により始まった共同調査の作業は、台南県クロツラヘラサギ保護学会、台南市野鳥学会および台南県政府の調査チームによって担当区域内を同時に調査し、毎年10月から翌年4月まで、毎月第2、第4日曜日に2回、午前7時から10時の間調査を行なった。クロツラヘラサギ保護学会と県調査チーム担当の曾文溪以北から八掌溪までの区域で、台南市野鳥学会担当は曾文溪以南から安平一帯で、ボランティアの参加を歓迎している。こうした共同調査は黙々と3年続いているが、メディアの報道はない。この先も続くだろう。しかし3年来依然としてクロツラヘラサギに関心を持つ友人たちの参加は期待できなかった。

数は何を語る

累積した4年の越冬期の共同調査の結果、最大個体数は年々増加し、2004年12月26日の840羽から2007年11月11日には1151羽と増加し(表1)、台南地域のクロツラヘラサギ個体群は2006年11月26日初めて1000羽の大台を超えたが、この年国際一斉調査があり(2007年1月21日)、この時かえって754羽と減少した、2006年1月8日の819羽と比較してマイナス成長ではないか、この結果をどのように考えて、次の調査を待つのか、とはいえ、この様な結果に幾つかの結論を得た。

1. 個体群は9月末から10月初めにかけて渡来が始まり次第に増加し、11月から12月にかけて最大数となり、その後小幅の増減を維持し、3月中旬に北への渡りが始まり、個体数は次第に減少し、5月になると運が良ければクロツラヘラサギを見れるほどとなる。

表1 2004~2008 台南地区クロツラヘラサギの合同調査 越冬期最大数

出現最大数日	八掌溪口	頂山塩田	七股クロツラ保護区	四草土城湿地	総計	備考
2004.12.26	33	16	607	186	840	
2005.01.23	57	24	383	277	741	国際一斉調査
越冬期最大数(日)	63 (03.13)	99 (01.14)	660 (11.28)	318 (03.27)	840 (12.26)	2004.10~ 2005.04
2005.12.24	1	20	593	426	860	2006.02.26 最大866
2006.01.08	4	24	532	259	819	国際一斉調査
越冬期最大数(日)	40 (03.11)	52 (02.26)	678 (11.06)	296 (03.26)	860 (12.24)	2005.10~ 2006.04
2006.11.21	0	0	833	184	1017	
2007.01.21	0	82	359	313	754	国際一斉調査
越冬期最大数(日)	44 (03.18)	82 (01.21)	833 (11.26)	352 (03.11)	1017 (11.26)	2006.10~ 2004.04
2007.11.11	0	15	1058	78	1051	
2008.01.13	2	45	750	218	1013	国際一斉調査
越冬期最大数(日)	90 (02.24)	106 (02.17)	1058 (11.11)	339 (02.24)	1151 (11.11)	2007.10~ 2008.04

表2 2004~2008 台南地区クロツラヘラサギの合同調査 越冬期最大黄色羽比率

年月日	八掌溪口	頂山塩田	七股クロツラ保護区	四草土城湿地	総計	備考
2005.03.25 黄色羽/総数 黄色羽比率	9/52 17.3%	0/2 0%	49/91 53.8%	111/318 34.9%	169/468 36.1%	04.17 頂山 70 黄色羽 5
2006.03.11 黄色羽/総数 黄色羽比率	0/40 0%	0 0%	155/334 46.4%	112/252 44.4%	267/636 42.0%	
2007.03.11 黄色羽/総数 黄色羽比率	18/44 40.9%	6/30 20.0%	314/355 88.5%	145/352 41.2%	483/781 61.8%	
2008.03.09 黄色羽/総数 黄色羽比率	29/65 44.6%	0/72 0%	366/478 76.6%	100/292 34.2%	495/907 54.6%	02.17 頂山 106 黄色羽 10
平均比率	25.7%	5%	66.3%	38.7%	48.6%	

2. もし区域の最大数と調査日を見ると(表1), 七股地区が依然としてクロツラヘラサギの主要な生息地であり, 個体数が最大になるのは4年とも11月である。頂山塩田湿地では後れて1. 2月に個体数が最大となり, 八掌溪河口と四草土城地区ではさらに後れて, 2末から3月末になる。やはりクロツラヘラサギの個体群の分布はまず七股地区に集まり, 12月以後次第に各地に拡散してゆく。

3. 各地区の羽毛が黄色になるものの比率を見ると(表2), 最も多く出現するのは3月で, 全体平均48.6%, 言い換えると繁殖期に黄色羽のクロツラヘラサギは成鳥と幼鳥を区別ができる, すなわち, クロツラヘラサギの成鳥・幼鳥比は1:1に近い。しかし, 七股地区は例外で, 成鳥の社交場として主要な場所で, 88.5%に達する成鳥がこの地を選択している。他の地区は40%以下で, 亜成鳥の多くが外に新天地を求めて分散していると思われる。

クロツラヘラサギの脚に付けられた記号

鳥類の標識は鳥類を捕獲した後, 基本的な体位を測定し, 脚あるいは他の身体部分に個体識別の記号を安全に装着して, 釈放し, それによって鳥類の生理, 行動, 生態等の研究資料とする。1994年国際クロツラヘラサギ保護行動綱領が正式に標識と衛星追跡調査方法が決められた後, 1995年から台南で救護された傷病クロツラヘラサギに衛星追跡用の発信機を装着し放鳥した(2カ月後消息が消え失敗)。北朝鮮において標識されたクロツラヘラサギの後, 今日まで内外共に140羽以上に続々と各国による標識放鳥が続いた。その内22個体に衛星追跡発信機が, 21羽にUHF発信機が装着された。それら各種の追跡手段によって渡りの経路, 行動圏などの調査が行われ, また, 脚環などの標識による肉眼観察で個体識別, 並びに回帰動向の調査は, 結局私達にクロツラヘラサギの行動と現状を理解することの助けとなり, 関係団体の保護活動協力を進めた。

T13のこと

台湾のクロツラヘラサギ研究の早期に王穎研究室により1996年の冬季, 七股においてクロツラヘラサギを捕獲してUHF発信機を装着し, 彼等の台南県の曾文溪河口における行動を追跡した。1998年東アジア共同の衛星追跡が行われ, 王穎教授の指揮により台湾クロツラヘラサギ作業チームが2月19日, 衛星追跡発信機装着後放鳥に成功した[Lucky7(衛星No4517)], これが第1回目の衛星追跡研究計画の事例となった。1999年1月11日台南市曾文溪河口で放鳥, 衛星発信機No2219, 台湾NoT16, 研究者は愛称で亀と呼び, 2000年3月14日に台南を離れ, 中国浙江省, 江蘇省沿岸を逐次進み, 3月31日韓国漢江河口先のU-do島付近に現れ, 渡りの経路や繁殖地の謎を解き, 併せて台湾におけるクロツラヘラサギ保護の国際的地位を確定した。残念ながら人為的要因で, この後からクロツラヘラサギの研究は放置され, かえって, 韓国, 日本, 香港などがますます研究に励んでおり, 台湾の長期にわたるクロツラヘラサギの生態, 動向に関心のある人はこの有様を憂慮した。思いがけず2年後, 台南市曾文溪河口でクロツラヘラサギのボツリヌス菌感染による中毒事件が発生した。2002年12月9日から2003年4月4日まで延々4ヶ月の間, 死亡83羽, 救護17羽という結果をもたらした。当時世界中に1000羽ほどしかいなかったクロツラヘラサギにとって小さくない損失であった。しかし, この悲劇はかえって転機をもたらし, クロツラヘラサギの保護活動への注目がもどってきた。17羽の救助に成功したクロツラヘラサギにT20~T37の記号を付した脚環とカラーリングを装着して放鳥し, さらに, 2004年から2008の間に銃創を負い回復した4羽(T38~T41)を加え, 台湾で標識されたクロツラヘラサギは全部で43個体となった。

合同調査で記録された個体数と調査地点のほか, 当然クロツラヘラサギの足環の記号を間違いなく記録し, さらにもう一つの挑戦は, 幸運でなければ目を皿のようにして見ても判別ができない, 加えて時が経つことによるカラーリングの脱色, 変色, 脱落と, あきらめるか或は調査をするのか, 時間のかかる調査であった。しかし, この七股クロツラヘラサギ保護区は最も優れた, 最も重要な調査場所である。表3から毎年20羽以上の標識されたクロツラヘラサギが台南地域で越冬しており, 全世界の標識個体の1/7に当たり, 台湾において標識放鳥され, 13~20羽が再記録され, 標識数の半分をしめる。その内T105, T13, T16, T18, H2は1998~1999年の研究計画にり放鳥された個体で, 4年共同調査の間にすべて報告され, 翌年3月に渡去しているものである。香港において1998年に放鳥されたA08も昨年冬七股に渡来した。

韓国で標識放鳥された個体はすべて幼鳥で, 発信機の装着はなく, 4年の内10羽(K36, K37, K38, K44, K47, K51, K52, K54, K70, K72)が記録され, 常にここでみられ, なおかつ, 頂山, 四草, 土城でも記録され, 澎湖島, 高雄でも見られ, 彼女らを追跡している。しかし, K36, K38のほかは2年目からは帰ってこなかった。現在の所, 日本で標識された個体の記録はまだない。しかし, 台湾で記録された標識個体は日本で記録されている。例えば, T39は2004/12/1ボツリヌス菌中毒により救護された後, 標識放鳥され, 2005年冬日本に出現し, 2006年冬, 香港において記録されている。T36は2007年春まで台南で越冬し, 同じ2007年冬, なんと沖縄の

豊見城まで飛んでいる。

おわりに

1990年以來クロツラヘラサギの個体群は急速に増加したが、しかし、この以前のクロツラヘラサギが危機に瀕した原因については諸説あり、人によっては朝鮮戦争により南北境界線付近のクロツラヘラサギ個体群が戦火の影響を受けた可能性を挙げ、50年代初めにかけて大幅に減少したと説き、また別に、生息地の環境破壊、消失を挙げ、ボツリヌス菌中毒など傷病によるクロツラヘラサギ個体群の減少、また、DNA標本を示し、個体群の生化学的分析による遺伝的過去の研究から、クロツラヘラサギ個体群がかつては1万羽以上もいたこと、クロツラヘラサギが遭難したきわめて厳しい瓶頸事件²は明らかに、97%の個体群消失を導いた。最後に推測される結論は、クロツラヘラサギの個体群は早くから大きく衰退しており、90年代以來個体群の数が急速に増加したのは、日、韓、中國大陸および台湾でDDTの大量使用が禁止されたのと時間的に一致する。これによりDDTの乱用による汚染の可能性が非常に大きく、90年代以前にクロツラヘラサギの個体数激減に導いた原因の一つと考えられる(楊愷案)。もちろんだうであろうと人間の生活、行動により生じた結果である。クロツラヘラサギの未来運命を壊すことが出来ますか？どんな場所へ引っ越すことが出来ますか？台湾は未来永劫あなた達の家ではありませんか？増加過程で生理の形が変わっても引き続き長く踊り続けることを期待して、台湾に幸あれ、クロツラヘラサギ頑張れ。最後に共同調査に長い間参加された方々に感謝し、また、クロツラヘラサギ保護学会から資料や写真の提供を戴いた好意に感謝します。

訳注

*1 1893年；明治26年。翌年日清戦争が始まる。

*2 瓶頸事件；ボトルネック事件、？

● クロツラヘラサギ保護学会網站；<http://mail.tnssh.tn.edu.tw>